

「3. 事前対策及び当日の避難行動に関する事実情報」(未定稿)

前回以降の主な加筆・修正箇所

3. 1 事前対策に関する情報

- 3. 1. 3 学校及び周辺の状況と地域の歴史 2
- (4) 地域における過去の災害履歴 (追記箇所のみ) 2

3. 2 事故当日の状況に関する情報

- 3. 2. 4 大川小学校付近における地震発生後の対応 4
- (2) 河北総合支所等による避難誘導 4
- (3) 地域住民の避難行動 5
- (4) 校内における対応 (修正) 9
- (5) 山への避難状況 16

3. 1. 3 学校及び周辺の状況と地域の歴史

(4) 地域における過去の災害履歴

①過去の主な自然災害

《中略》

②最近の災害等における大川小学校の対応状況

上記の表中にも記載したとおり、事故の約1年前にあたる平成22年2月末、南米・チリ沖で発生した地震により宮城県沿岸に大津波警報が発表され、大川小学校に避難所が開設された。このとき、同校の体育館に、長面地区にある旅館の利用者など十名程度が避難した。この中には、釜谷地区の住民も少数ではあるが含まれていたとの証言がある。また、このとき、釜谷交流会館にも谷地中の住民数名が避難したとする証言もある。

この日は土曜日であったため、学校は休みとなっていたが、大津波警報の発表後に教頭が同校へ来て、校庭で行われていたスポーツ少年団・野球チームの練習を中止させ、帰宅を促したという証言がある。また、この大津波警報を契機として、同校の教職員の間で、地震・津波に対する対応のあり方が話題になったものの、津波警報が出された際の具体的な対応や避難先の検討までには至らなかったとの証言もある。

さらに、東日本大震災の2日前となる平成23年3月9日午前11時45分頃、三陸沖を震源とするマグニチュード7.3の地震が発生し、宮城県沿岸などに津波注意報が発表された(11時48分発表、宮城県沿岸の到達予想時刻12時00分、予想津波高0.5m。同日14時50分解除)。このとき、石巻市で震度4の揺れが観測され、大川小学校では校庭への二次避難が行われた。

校庭では20分間程度、待機していた。この間、教職員は児童の掌握、校舎内の状況確認を行うとともに、うち1名が川の状態を見に行ったが、川に変化が見られなかったため、児童を校舎内に戻すという判断が下されたという証言がある。また、校庭にいる際に、教職員の間で「山へ避難するか」という提案がなされたが、必要ないという判断が下されたとの証言もある。さらに、校舎に戻った後の給食時間中、校長、教頭はじめ職員室に残っていた教職員の間で校庭からの避難先について話題となり、北上川の堤防を超える津波が来た場合には校舎内に避難できないこと、竹林部分を登って山へ避難する必要があること、

より安全に避難できる場所を確保する必要があること、などという会話が交わされたという証言がある。しかし、このことを教職員全員で確認し合うまでには至らなかったとのことである。

米
定
館

3. 2. 4 大川小学校付近における地震発生後の対応

(2) 河北総合支所等による避難誘導

地震発生と津波警報の発表を受け、河北総合支所の職員6名が、沿岸部（尾崎・長面地区）への避難誘導広報や水門閉鎖のため、2人体制で公用車3台に分乗して14時55分から15時の間にそれぞれ支所を出発した。

また、これとほぼ同時期にあたる14時56～57分頃、河北消防署からも署員1名が広報車で出発し、新北上大橋を経由して釜谷、長面方面で津波広報を実施した。この広報車は、新北上大橋を通過後、釜谷地区内を長面方面に移動しながら「津波警報が発令されています。避難して下さい。」と継続してマイクで避難を呼び掛けた。消防の広報車が大川小学校前を通過したのは、15時15～20分頃である。

支所職員A及びBが乗って長面方面へ向かった公用車では、消防無線から「津波警戒隊はすべて避難せよ。」との情報を得た。他2台の公用車は消防無線を傍受できなかったことから、各車に無線でその情報を伝えた。また、新北上大橋上を走行中に「女川に津波が到達」との情報¹⁾を得た後、釜谷地区を長面方面へ向けて走行する際に、スクールバスが県道上を長面方面を向いて止まっているのを見た。

支所を3台目に出発した公用車に乗っていた支所職員C・Dは、15時23分頃、体育館に避難者の受け入れが可能かどうか確認するため、大川小学校に寄った。これは、前年のチリ地震で津波警報が発表された際、同小の体育館に沿岸部からの避難者を受け入れた経緯があったためである。校庭にいた教職員に確認したところ、体育館は照明器具落下の危険性があるので受け入れできないとの回答であった。

支所職員A・Bは、谷地中付近を走行中、長面の松林を津波が越えてきたのを確認してUターンした。谷地中で「松原を津波が抜けてきました。」と広報し、谷地中を過ぎてからスピードを出して釜谷地区中心部に向かった。釜谷地区中心部の入口から三角地帯の信号機辺りまで「松原を津波が抜けてきたので避難して下さい。」と避難を呼び掛けながら、時速40km程度でゆっくり走行したと証言している。釜谷地区の県道沿いに7、8名の地域住民がいたが、避難する様子にはなかった。

一方、支所職員E・Fの乗るもう1台の公用車が谷地中から100m程度釜谷寄りのところを走行していたとき、前方から職員A・Bが乗った公用車が戻ってきた。職員A・Bは車の窓を開け、「津波だ、逃げろ。」と叫んだ。支所職員E・Fは、高さ18～20mの松林を越える白い波が見えたため、釜谷方面へUターンした。新北上大橋方面へ戻る際、学校のスクールバスは県道向きで校地内に入っており、運転手はバスの脇にいた。学校付近の県道には、子どもを迎えに来た保護者の車が数台停まっていた。

¹⁾ 支所職員はこの情報を消防無線から得たと証言したが、その情報内容から判断して、消防無線ではなく、15時21分頃に放送されたラジオ放送である。

1 支所職員C・Dは15時24分頃、学校を出た。学校付近に車が4、5台駐車していたの
2 で、スクールバスの運転手に誘導してもらい、バックして県道まで戻った。運転手は、校庭
3 脇で地域住民と話をしたり、車の誘導をしていた。谷地中から戻ってくる職員A・Bが乗っ
4 た公用車と郵便局付近ですれ違った後、釜谷霊園の辺りを走行しているときに、長面方面か
5 ら走行してきた一般車両から「津波が来るから、この先には行くな。」と言われ、釜谷方面
6 に引き返した。Uターンしているときに、富士川の堤防から水が漏れており、堤防上を船が
7 津波に押されて流されているのを見た。

8 支所職員6名の乗った3台の公用車は、いずれも三角地帯に到着して、付近に停車した。
9 6名のうち1名が車内に残って避難を呼び掛け続け、他の職員は車から降りて間垣方面から
10 釜谷方面に進もうとする車を雄勝方面へ誘導した。誘導にかかった時間は、1台あたり15
11 ～30秒程度であった。釜谷町中から三角地帯へ向かう県道は、この間、最上屋の前付近ま
12 で車が3～5台滞留したときもあった。

13 その後、川の水面は堤防の高さを越えるほどになり、新北上大橋付近に船が流れてきた。
14 雄勝側の斜面はコンクリート吹付の法面が続いて登れないため、職員らは山の雑木林とコン
15 クリート法面の境目付近を登った。新北上大橋から水の塊が富士川に流れ込み、次の瞬間、
16 富士川から三角地帯に水が溢れてきた。6名の支所職員のうち車内に残って広報を続けてい
17 た1名が逃げ遅れて津波にのまれ、別の1名も津波をかぶって衣服が濡れた。支所職員の一
18 人は、山の斜面に登った後、間垣の堤防が、川に面していない側から縦に崩れ、さらに全体
19 が崩壊するのを目撃した。

20 (3) 地域住民の避難行動

21 地震発生後、地域住民の多くは釜谷交流会館に避難し、大川小学校に避難した地域住民は
22 それほど多くなかった。地震後、通りを歩いていて、顔見知りの住民に「学校か釜谷交流会
23 館に避難するように」と勧められたとする証言や、高齢者や寝たきりの住民を釜谷交流会館
24 へ移動させていたとする証言がある。一方で、県道を長面方面から戻りながら津波来襲を告
25 げる支所公用車の広報を聞きながらも、避難行動をとらなかった住民もいたとの証言もある。

26 津波来襲時に釜谷地区にいて避難できた地域住民の多くは、津波が来襲したのを実際に見
27 たり、津波来襲を見た人の「津波だ」「高い所に逃げろ」との避難の呼び掛けに応じたりし
28 て避難しており、津波来襲を確認する前に避難した者は少数である(次表参照)。防災無線
29 や市職員の広報車からの避難の呼び掛けは聞こえなかったという証言も少なくない。

30 証言を得られた地域住民の避難行動の経過は、以下のとおりである。

助かった釜谷地区住民の避難のきっかけ

(当時、釜谷地区において助かった住民等52名中、詳細な行動が半明した28人について)

避難開始のきっかけ	人数
津波そのものを目撃して (内、釜谷地区内の低地・三角地帯で一度止まった人)	9人 (2人)
津波を目撃した人に言われて (内、釜谷地区内の低地・三角地帯で一度止まった人)	16人 (11人)
津波について見聞きする前に	3人
計	28名

①地域住民A

堤防付近に自宅のある地域住民Aは、近所の住民が堤防から水がこぼれてくるのを見て「津波が来ているのでは?」と言ったのを聞いた。自ら富士川の堤防に登ってみたところ、北上川の堤防から水がこぼれているのが見えたため、近くにいた近所の住民たちに「子どもたちを車に乗せて逃げろ」と呼びかけた後、自分も車に乗って堤防沿いの道路を通り、釜谷交流会館方面へ向かった。釜谷交流会館には、既に地域住民数名が集まっていた。「津波が来るから逃げろ」と呼び掛けたが、誰も逃げようとしなかった。そのうちに後ろからバリバリとすごい音がした。津波に追いかけられながら、釜谷交流会館の横の竹やぶから山に登った。山に逃げる途中、釜谷交流会館の駐車場の奥に、移動している児童の後ろ姿(最後尾)を見た。このとき、校庭には何人かの大人が残っていた。

②地域住民B

地域住民Bは、地震後、自宅の片付けをしていたが、余震で外へ出た。自宅の畑からポツポツと水が浮いているのを見た。夫が堤防に登ってみたところ、川を遡上する三角に盛り上がった津波が見え、船も流れてきた。夫に「逃げろ」と言われ、家族とともに走って交流会館に向かった。山に逃げる前、児童が校庭に並んでいる姿が見え、「三角地帯に移動します」と言っているのが聞こえた。竹やぶ付近から山に登ったが、途中で上から水をかぶり、津波にのまれた。

③地域住民C

地域住民Cは、余震の後、家族に勧められ、自宅から釜谷交流会館へ避難しようとした。釜谷交流会館前で地域住民Aが「山に逃げろ」と言っているのを聞き、津波が来ているのを確認しないまま、山に向かった。山にたどり着かないうちに津波にのまれ沈んだが、次に来た波で山に打ち上げられた。その直後に、すごい音がして、建物が流され、トタン等がぶつかる音が何分か続いた。子どもたちの「助けて」という声も聞こえた。

④地域住民D

1 地域住民Dは、地震後に外出先から自宅に戻り、高齢の家族を乗せて、車で釜谷交流会館
2 に向かった。学校と釜谷交流会館の間の道路で地域住民らが「津波が大きい」などと話して
3 いたので、高いところに逃げたほうがよいのではないかと思った。以前、家族と「宮城県沖
4 地震で津波が来たら雄勝峠に避難したほうが良い」と話したことを思い出し、本当に津波が
5 来るとは思わなかったが、Uターンして県道を通り、三角地帯を抜けて雄勝峠方向へ向かつ
6 た。後に、津波が釜谷地区を襲ったのは、自分たちが出発してからすぐだったと聞いた。

7 ⑤地域住民E

8 地域住民Eは、地震後に外出先から自宅に戻り、家族のうち数名を大川小学校に避難させ
9 た。その後、毛布等を積み、車で釜谷交流会館へ行った。県道から学校と釜谷交流会館の間
10 の道路に入るところで、地域住民が交通整理していた。知人から、一人暮らしの人や寝たき
11 りの人を交流会館に連れて来ていると聞いたため、自宅にいた要介護の高齢者を交流会館に
12 連れてこようと考え、歩いて自宅に戻ろうとした。知人達と話している際、校庭から「三角
13 地帯まで移動します」と声を掛けているのが聞こえた。交流会館と学校の間の道路を歩いて
14 自宅に向かい、学校の自転車小屋の手前あたりまで来たときに、正面の県道を越えた先に大
15 土手（北上川の土手）を跳ね上げる水が見えた。跳ね上げた水の高さは、道路両脇の家（ほ
16 とんどが2階建）より高かった。恐怖心からすぐに背を向け、山に向かって走った。山に向
17 かって走り始めてすぐに、バリバリと家が壊れる音が聞こえ、そのまま津波にのまれた。「三
18 角地帯に移動します」という声を聞いてから、津波が来るまでは数分だった。

19 ⑥地域住民F

20 地域住民Fは、何かを放送しながら長面の方に向かう広報車を見たが、スピードが早くて
21 何を言っているのかわからなかった。広報車は長面方面から戻ってきたが、このときも何を
22 言っているの聞き取れなかった。防災無線も全く聞こえなかった。堤防の様子を見に行っ
23 た2軒隣の住民から「津波が来た」と知らされ、続いて地域住民Aから「早く逃げろ」と言
24 われた。そのため、家族らと車で避難した。釜谷交流会館と学校の間の道路には、釜谷交流
25 会館に向かう地域住民の姿が見えた。自分達も釜谷交流会館に行くべきか迷い、最上屋の前
26 で停止した。そのとき、右斜め前方向に堤防側へ通じる細い道路の正面にある富士川の堤防
27 から津波が溢れているのが見えて怖くなり、高い場所に避難することにして発進した。三角
28 地帯のバス停辺りで、支所職員2名が雄勝方面に車を誘導していた。雄勝方面から来る車と
29 雄勝方面へ行く車が詰まって数秒停止した。新北上大橋の上流と下流の両方で、堤防を越え
30 て波が溢れてくるのが見えた。後部座席に座って後ろを見ていた家族が津波が来たと大騒ぎ
31 になったため、詰まっている車を避けるような形で三角地帯を通り抜け、雄勝方面へ進んだ。

32 ⑦地域住民G

33 地域住民Gは、地震時にいた外出先から自宅へ戻り、自宅裏にエンジンをかけたままで車
34 を停めていた。自宅裏にある富士川の堤防を超えて黒い水が溢れるのを見て、車に乗り、県

1 道へ出た。県道沿いには数人の地域住民が立ち話をしていた。三角地帯を抜けて雄勝方面へ
2 向かう道は数台の車が数珠つなぎになっており、新北上大橋にぶつかった波のしぶきが車に
3 かかった。渋滞した箇所を抜けるとき、間垣方面で車や家が流されているのを見た。

4 ⑧地域住民H

5 地域住民Hは、新北上大橋のやや上流にある作業場で、地震後の片付けをしていた。音が
6 したので外に出ると、新北上大橋に津波が来ていた。間垣の堤防上で、地域住民がそれを見
7 ていた。何度か波をかぶったが、建物の陰に入ったり、窓枠にしがみついたりして助かった。
8 その後、三角地帯の方へ歩いていったところ、斜面の上から支所職員に「また津波が来てい
9 る」と声を掛けられ、手を貸してもらって斜面を登った。

10

1 (4) 校内における対応

2 ①地震発生と一次避難

3 地震が発生した14時46分頃、大川小学校では、全学年がその日の授業を終えていた¹⁾。
4 得られた証言によると、1年生と5年生は教室で「帰りの会」の終わる直前、4年生は教室
5 で歌の練習をしていた。また2年生、6年生は帰りの会が終わってすでに解散していた。地
6 震発生前に、子どもを迎えに来ていた保護者が校内ですれ違った6年生児童から元気に「さ
7 ようなら」と挨拶されたという証言や、下校途中の一部児童の姿を校外で見かけたという証
8 言がある。3年生については、すでに帰り支度を済ませていたと見られる状況がある一方で、
9 「帰りの会の終わる頃だった」という証言もある。

10 校内にいた教職員のうち、担任クラスを持たない教職員A(教務主任、生存教諭)は更衣
11 室、教頭と教職員Bは職員室にいた。またクラス担任のうち教職員Cは、児童を迎えに来た
12 保護者と話をするために渡り廊下を体育館側へ移動している最中だったが、他のクラス担任
13 はほとんどが受け持ちの教室にいた。校長は当日の午後に休暇をとって不在にしており、ま
14 た、教職員Dは用務のため校外にいた。さらに、地震発生時には数名の保護者が、子どもの
15 迎えなどのために校内あるいは学校付近にいた。また下校する児童を待つスクールバスが、
16 尾崎・長面方面へ向かう第1便(14時58分出発予定)のため、県道238号線上を東に
17 向いて止まっていた。

18 児童は、地震の発生と同時に机の下に隠れた(一次避難)。1～2年生のいる低学年棟の
19 教室からは「怖い～」「お母さ～ん」などの泣き声が聞こえたが、3年生以上の教室は比較
20 的静かだったという証言がある。しかし、高学年の教室でも、混乱して無意味な行動をとっ
21 たり泣き出したりする児童もいた。一方で、高学年では、2日前の地震で同様の経験をして
22 いたことが教職員に指示される前の円滑な避難につながったとの証言もある。

23 クラス担任たちは、受け持ちの児童に声を掛け、揺れが収まるまで一次避難を続けるよう
24 に指示をしたり、泣き出した児童を落ち着かせようとした。たとえば、教室をやや離れてい
25 た教職員Cは、すぐに戻って自分のクラスと隣のクラスに「机の下へ」などと一次避難を指
26 示した後、訪ねてきていた保護者にも身を守るように伝え、教職員Eは、揺れの最中も教室
27 の入口付近に立ち、落ち着いて子どもたちのようすを見守っていたという証言や、教職員F
28 は泣きだした児童をなだめていた、などという証言がある。児童同士も、互いに声を掛け合
29 い、揺れが収まるまで避難を続けた。

30 教職員Aは地震発生後、急いで更衣室から職員室に移動して上着をはおり、私物の携帯電
31 話を上着のポケットに入れた。その後、教頭と相談の上で、揺れが続く中、校舎内を走り回
32 って一次避難を呼び掛けた(停電で校内放送は使えなかった)。この際、まず低学年棟の1

¹⁾ 石巻市教育委員会提供資料によると、震災当日の「帰りの会」終了予定時刻は全学年14時35分だ
たとされている。一方、この週は卒業式の予行演習などが入っていたため授業時間短縮の措置がとられ
ており、通常より早めに終了していたのではないかとの証言もある。

1 ～2年生の教室に声を掛け、続いて2階に上って3年生以上の教室に声を掛けている。

2 ②校庭への二次避難

3 3分ほど続いた揺れが収まったのち、教職員Aは、さらに校庭への二次避難を呼び掛けた
4 2)。児童たちは、クラス担任による誘導の下、1～2年生は教室の窓から直接、3年生は県
5 道側の階段を降りて昇降口から、4～6年は体育館側の階段を降りて体育館側出口から、そ
6 れぞれ校庭へ避難をした。

7 校庭への避難の際、すでに帰りの準備が終わっていた児童を除き、ほとんどの児童が室内
8 での服装のまま、避難訓練と同様に、ランドセル等の持ち物を持たずに校庭へ避難した。た
9 だし、ヘルメットをかぶったり手に持ったりして避難した児童もいた。

10 校庭では各学年2列に並んだ。各学年がどこに並んだかについては、学年順で体育館側が
11 高学年だった、学年順だったが逆に体育館側が低学年だった、規則性がなかった、校庭へ避
12 難してきた順番に道路側から並んだなどというさまざまな証言がある一方で、途中で並び替
13 えたという証言もあった。

14 児童らが校庭に出てそれほど時間がたたない頃に、校庭の道路側に設置された防災行政無
15 線子局から「大津波警報発令」の広報が流れた（市の記録によると、これは14時52分と
16 されている）。複数の児童がこれを聞いたと証言している。

17 ③二次避難後の校舎内の確認等

18 一方、児童らに二次避難を呼び掛けた教職員Aは、その後、校舎内すべての教室・トイレ
19 などを回って、残っている児童がいないことを確認した。校舎内では、ガラスが割れるなど
20 の大きな被害はなかった（一部、ガラスが割れる音がしたとの証言もある）ものの、廊下で
21 は防火扉が閉まっていた。職員室では棚の上のものが散乱したり、鍵を一括管理していたキ
22 ーボックスが落下して鍵が散乱したりするという状態だった。

23 教職員Aは、15時少し前頃には校舎内の確認を終えて校庭に出て、教頭らに残留児童が
24 いなかったことを報告した。その時点では、校庭における（クラス担任らによって行われた）
25 人員確認は終わっていたとの証言がある。このとき、教職員Aは教頭らに「山へ行くか」と
26 という趣旨の問いかけをしたが、この状況では難しいのではないかという意見が出されたとの
27 証言がある。

28 その頃、校庭には、体育館への渡り通路の下や自転車小屋の脇などを通して、校庭に地域
29 住民が避難してきていた。その人数は、多くても数名から十数名程度であった。校庭でこれ
30 ら地域住民がいた場所としては、自転車小屋付近のタイヤ遊具付近や、校庭の中でも釜谷交
31 流会館に近い側という証言がほとんどである。

32 教職員Aは、避難してきた住民の様子を見て体育館への受け入れを考え、体育館の状況を
33 確認しに行った。体育館1階の入口はすべて施錠されており、その鍵が入っていたキーボッ

2) この際に教職員Aが「山へ」と呼び掛けていたとする児童の証言があるが、当委員会として、当人から直接これを確認することはできなかった。

1 クスは地震により落下・散乱して鍵の特定が困難だったため、外からではなく内側から解錠
2 するために校舎側から2階の渡り廊下を通して体育館に入った。渡り廊下は継ぎ目に段差が
3 生じており、また、渡り廊下から体育館に入るドアは変形したためなかなか開かなかった
4 ため体当たりをして開けた。体育館の中は天井の部材などが落下しており、また校舎側1階
5 入口扉を内側から開けて外に出ると、付近に設置されていた暖房用灯油タンクの継ぎ目から
6 灯油が漏れていた。また、余震のたびに2階の窓ガラスが大きく揺れているなど、体育館の
7 窓ガラスは落下の危険があると教職員Aは考えた。

8 このため教職員Aは、体育館内へ入ろうとする住民数名に対し、危険であることを伝え、
9 体育館から離れるように言った。また、校庭に戻り、教頭らに対して、体育館は使用できな
10 いことを伝えた。

11 ④二次避難後、15時15分頃までの校庭の状況

12 校庭に出た教職員らは、それぞれが担当するクラスの付近にいて、児童の面倒をみるなど
13 していた。余震による激しい揺れで、悲鳴をあげる児童、泣き出す児童もいた。低学年を中
14 心に泣いている児童が何人もいたため、教職員はこれを落ち着かせようと「大丈夫だよ」「怖
15 がらなくていいから」などと声を掛けた。中には嘔吐する児童もいて、担任の教職員Gがそ
16 の世話をしながら励ましていたとの証言もある。

17 児童のそばにいただけでなく、複数の教職員は指揮台（朝礼台）周辺に集まって話し合っ
18 ていたとする証言も多数ある。ほぼ全員の教職員が集まっていたという証言もある一方で、
19 数人が指揮台周辺に集まり、それ以外は児童の列を囲むようにしていたという証言もあり、
20 指揮台周辺で相談に加わっていた教職員の人数は証言によって異なるものの、教頭や教職員
21 Eなど、高学年の担任や比較的年配の教職員が集まっていたとの証言がある。

22 指揮台の付近では、教職員がラジオを聞いていたとの証言がある。一方で、少なくとも職
23 員室にあったCDプレーヤー付きラジオは、地震の揺れで落下して使えない状態だったため
24 持ち出されていなかったとして、ラジオは聞いていなかったとする証言もある。

25 15時少し前くらいから、地震発生時に校内あるいは学校付近にいた保護者が、引き渡し
26 を求め始めた。教頭が引き渡しを記録するよう指示し、教職員Bが校舎内から名簿を取っ
27 てきたという証言がある。当初は、教職員Cが記録を担当して引き渡しを始めた。引き渡しは
28 スムーズに行われ、およそ15時10分くらいまでの間に9名の児童の引き渡しが完了した。
29 なお、そのうち1名は、親族以外（別の児童の保護者）に引き渡された。また、引渡しのた
30 めに長机が準備されていたとの証言もあるが、一方で、そのような机には気づかなかったと
31 いう証言もある。

32 迎えに来た保護者は、互いに知っている者同士が津波警報が出されていることを伝え合っ
33 たりしており、複数の顔見知りに対して「津波が来るから逃げて」と伝えたという証言する者も
34 いる。また、中にはラジオ等で聞いた津波に関する情報をもとに、これを教職員に伝えて「山
35 へ」と避難をうながす保護者もおり、同人は、その際に教職員から「お母さん、落ち着いて」

1 と声をかけてもらったと証言した。しかし一方で、児童を引き渡された後もしばらく校庭に
2 残って知り合いの保護者などと話をしている保護者や、学校に来たものの子どもの引き渡し
3 を受けずにまた学校を離れた保護者もいた。

4 この間、教職員 A は、校外にいる校長や市教育委員会へ何度も電話をかけたが、つながら
5 なかったとしている。そこで、数日前に災害時優先電話となる避難所特設電話のコネクタが
6 体育館階段下に設置されたことを思い出し、職員室から接続用の電話機を持ち出して接続を
7 試みた。しかし、コネクタ部に鍵がかかっていたか、あるいは物が倒れたりしていたか、い
8 ずれかの理由で接続はできず、電話を利用することはできなかった。

9 15時10～15分頃、スクールバスの運転士が、同僚運転士と無線で交信している。そ
10 の交信の中で、スクールバス運転士は「学校の判断が得られない」と述べ、これに対して交
11 信相手の同僚は「自分の判断で避難しろ」と伝えたと証言している。また、これとほぼ同じ
12 頃、長面地区に住む保護者の一人が自宅へ帰る途中で大川小学校の前を通った。この保護者
13 は、停車中のスクールバス近くにいったん停車して、顔見知りだったバスの運転士に「子ど
14 もは送ってもらえるのか？」と聞き、運転士から「待機している。(子どもを自分で連れて
15 行くかどうか)自分で判断した方がいい」という返事を得た。

16 ⑤この間の校庭における教職員・児童の会話内容など

17 校庭での二次避難を続ける児童の間では、防災行政無線で「大津波警報発令」を聞いたこ
18 ともあり、避難直後から「津波が来るのかな」「ここは海岸付近かな」「来てもらいたこと
19 ないだろう」などと津波のことが話題になっていた。中には、2日前に起こった地震を受け
20 て保護者から「大きな地震の際は津波が来るから山へ逃げろ」と教えられていたため、教職
21 員に「山に登るの」と尋ね、「登れないんだよ。危ないからダメなんだ。校庭にいた方が大
22 丈夫だよ。」と言われた児童もいる。また事故後、亡くなった子どものようすを複数の児童
23 に尋ね、いずれの児童からも「亡くなった子が山への避難を強く教職員に訴えていた」と聞
24 いた保護者もいる。

25 避難直後は1学年2列ずつに整列してしゃがんでいた児童たちの列は、引き渡しが進むに
26 つれて人数が減っていったこともあり、時間の経過とともに徐々に崩れた。教職員から「丸
27 くなっていい」と言われて輪になったという証言もあるが、特に指示がないまま自然と輪に
28 なって話をするようになったとの証言もある。

29 児童の中には、2日前の地震で校庭へ避難した際には何も起こらなかったことから、当初
30 はそれほど強い不安は感じていなかったものの、天候が悪化して雪が降り出す中で徐々に不
31 安感が増し、また当初は津波の心配をしていたが徐々に自宅のことを気に懸けるようになって
32 したとする証言もあった。また、繰り返す余震のたびに「おお～！」という声が児童の間で広
33 がったりもしていた。余震が怖いため、輪になった児童は、互いに手をつないだり、「大丈夫
34 だぞ」などと励まし合ったりしていた。しかし一方で、一部の児童が校庭の端にある樹木
35 の付近で遊び始めたとする証言や、子ども同士の会話内容はゲームやマンガ、翌週の時間割

1 のことなど日常的なものだったとする証言もある。児童から得られた証言の中には、教職員
2 から何の指示も出されなかったので、待つしかなかった、遊ぶようになった、などと述べる
3 ものもあった。

4 一方、この間も教職員は、校庭に来た地域住民も交えて相談していた。地域住民のひとり
5 は、「津波が来る」などと言いながら、校門から校庭方向へ走る姿を目撃されている。時期
6 は明らかではないが、この相談の中で、山に危険がないかどうかを教職員が地域住民に相談
7 していたという証言がある。また、これもどの時期かは不明であるが、校庭より若干敷地の
8 高い釜谷交流会館の駐車場へ移動してはどうかという提案が地域住民から出されたが、駐車
9 場は校庭よりも狭い上に、余震による建物被害の危険性があるのではないかという判断から、
10 移動はしなかったとする証言もある。

11 ⑥ 15時15分頃から三次避難開始まで

12 地震直後から降り出していた雪の影響もあって、校庭で待つ間に、寒さへの対応を行う必
13 要性が高まった。教職員 A は、低学年棟の1～2年生の教室からジャンパーなどの服を持ち
14 出して児童に渡したり、一部、引き渡す児童の荷物を教室から取り出すのを手伝ったりして
15 いた。他の一部教職員も同じように対応したようで、児童の中には、担任だった他の教職員
16 に上着を持ってきてもらったとする証言もある。

17 15時20分過ぎ頃、当初から引き渡し対応の中心的役割を担っていた教職員 C が引き渡
18 しを外れ、他の教職員が代わる代わる担当するようになった³⁾。引き渡しを交代した教職員
19 C は、昇降口付近に置かれていたかまどと薪を運搬用の一輪車に乗せ、校庭へ運んだという
20 証言がある。

21 その後、教職員 A は、教頭や教職員 E に「山に逃げますか？」と声を掛けたが、これに対
22 して何らかの返答や指示はなかったと証言している。このため教職員 A は、自分が校内にど
23 こか安全に避難できる場所がないか探すと伝え、再び校舎内へ入った。

24 15時23分頃、長面地区の住民の避難を念頭に、大川小学校の体育館が受け入れ可能か
25 どうかを、河北総合支所の市職員が確認に来た。対応した教職員は、落下物等が多く危険な
26 ため利用ができないと伝えた。市職員が校内にいたのはごく短時間（1～2分）で、体育館
27 に関する会話以外には特に会話はしなかった。この市職員の乗る公用車は、県道へ戻る際に
28 スクールバスの運転士に誘導を受けている。

29 一方、上記の市職員が小学校に来た直後頃、県道上に停車していたスクールバスが、バック
30 クで正門から校地内に入ったとみられる。

31 この頃に児童の引き渡しを受けた保護者は、学校を車で出てから三角地帯から大橋を渡つ
32 た。この保護者は、橋の上から津波の立ち上がりと思われる白波が橋の下あたりに見えたと

³⁾ どの教職員が引き渡しを担当したか確認できる児童13名のうち、15時20分頃までに引き渡された10名の内訳は、教職員 C が7名、教職員 H が2名、教職員 I が1名だった。これ以降は、教職員 C が0名、教職員 H が1名、教職員 E が1名、教職員 J が1名になっている。

証言し、また、同乗者は遠く下流に一段と高い波が押し寄せている様子が見えたと述べた。

⑦三次避難から津波来襲まで

その後、15時33～34分頃になって、校庭からの三次避難として、三角地帯への移動が決定された。移動開始に際しては、教頭をはじめ教職員が児童らに指示を出したという証言がある。また、地域住民が「三角地帯に移動します」と呼び掛ける声を、学校付近にいた地域住民が聞いている。

移動経路は、自転車置き場の脇から道路Aに出て、釜谷交流会館の駐車場を横切って民家宅地内の通路へ向かい、その先を右に曲がって県道を目指すというものだったという証言がある。移動開始から列の先頭が交流会館の駐車場入口付近にさしかかる頃までは、校庭にいた地域住民が先頭付近を歩き、そのあとに児童が続いていたため、その移動速度はかなりゆっくりだったとする証言があるが、児童の中には、移動の際に地域住民の姿は見なかったとする者もいる。また児童のひとり、自分が校庭を出る頃から、付近に教職員Iがいたと証言している。

校庭からの移動開始に際して、教職員Kがひとり、移動後に引き取りに来た保護者への対応のために校庭に残ったという証言がある。また、移動を開始した頃、教頭は児童たちの進む経路を進まず、道路Aを県道の方に向かった。教頭は、その後すぐに戻ってきて、「津波が来ていますので皆さん急いでください」と児童らに声を掛けた。

その頃、教職員Aは、校舎内の2階に避難できる場所の目安を考えて、渡り廊下から体育館に移動し、体育館入口から校庭に出た。その際、児童の移動はすでに始まっており、先頭は釜谷交流会館の駐車場付近、最後尾が校庭のタイヤ遊具のあたりにいて、移動している児童たち以外は校庭に人影がなかったと証言している。教職員Aは、避難する列を小走りで追い、付近にいた人（特定できないが成人）にどこへ向かうのか聞いたところ、三角地帯へ移動することにしたとの回答を得たと証言している。このときの移動速度は、早足程度だったという証言がある。

津波が来ているから急ぐようにとの教頭の声掛けを受け、列は乱れ、小走りで先を目指した児童もいた。校庭から150mほど移動して県道に差し掛かったあたりで、先頭付近にいた一部の児童らは新北上大橋直下付近から津波が越流し、付近の家を破壊した様子を目撃した。この津波を目撃した児童らはあわてて来た道を走って戻り、正面にあたる山の斜面を駆け登った。この付近の斜面は急だった上に、雪が積もっていたためにとっても登りづらかったという証言がある。なお、列の先頭にいなかったために津波を目撃していない児童らは、逃げている児童がなぜこのような行動をしているか理解できない様子だったとの証言もある。

一方、教職員Aは、列の最後尾付近にいて、釜谷交流会館の駐車場から出たあたりか、その少し先あたりにいた。教職員Aの証言による、津波の来襲状況と教職員自身の対応は、以下のとおりである。すなわち、後方（学校の校庭側）から強い風が吹き、同時に雷のような、離陸する飛行機のエンジン音のようなゴーという音が聞こえたため、児童らの列が向かう先

1 の県道をふと見ると、家屋の半分くらいの高さで長面方向から三角地帯方向へ移動する津波
2 が見えた。この時点では、県道部分以外には津波は来ていなかった。少し前まで走って先を
3 進んでいた児童らに大声で「こっちだ、こっちだ！山だ、山だ！」と声を掛け、これに気づ
4 いた数人の児童が山へ走り出したのを見て、教職員 A も叫びながら山へ駆け上がった。

5 この直後、教職員や児童のいた付近一帯を津波が襲った。教職員 A 以外にも、津波来襲の
6 直前、突風のような風を感じたり、飛行機の音のような大きな音を聞いたとする者が少なく
7 ない。

8



1 (5) 山への避難状況

2 ①教職員Aと児童1名の避難状況

3 教職員Aの証言によると、津波来襲時の山への避難状況は、次のとおりである。教職員A
4 は、山の斜面を登ったところで、倒れてきた樹木に身体の一部が挟まれた。頭から水をかぶ
5 ったものの、上から児童の助けを呼ぶ声が聞こえたため、「上に行け、走れ」などと叫んだ。
6 その後、挟まれていた部分から抜け出すことができ、自身も斜面を上へと登っていったが、
7 その過程で眼鏡などを失った。

8 教職員Aは、山の斜面上で一人の児童と合流した。この児童も津波をかぶって咳き込むな
9 どしていたとする証言があるが、一方で、この児童は津波に濡れていないとする証言もある。

10 教職員Aは、その後、怖がる児童とともに、安全な休める場所を求め、斜面の上へと3回
11 ほど場所を変えながら移動したと証言した。さらにその後、時間経過とともに気温が下がっ
12 たため、眼鏡を失ってほとんど目が見えない教職員Aの「目の代わり」を児童が務めるよう
13 にして山中を移動したところ、林道を経由して、入釜谷側にある事業所まで到着することが
14 できた。教職員Aは、すでにその時点あたりは暗くなっていたと証言しているが、一方で
15 避難場所を提供した事業所関係者は、まだ明るいうちだったと証言している。また、この事
16 業所関係者は、教職員Aが到着後に、はっきりとは聞き取れない声で「大川小学校の…」と
17 述べ、一緒にいた児童を大川小学校の児童であると紹介して挨拶させていたと証言している。
18 さらに、このときに教職員Aが「一人しか助けられなかった」と言っていたこと、教職員A
19 と児童がほとんど汚れていなかったため、負傷者や津波に巻き込まれて汚れた人のいる事業
20 所側ではなく自宅の座敷に二人を通したことも、併せて証言した。

21 教職員Aは、通された座敷で、余震のたびにストーブを消したりしながら、一夜を明かし
22 た。翌朝、児童とともに前日に下った林道を上っていく途中、支所職員とともに山中で一晩
23 を明かした児童らに出会った。

24 ②児童2名及び支所職員等の避難状況

25 校庭からの三次避難中、児童2名は、津波を目撃して来た道に戻り、正面にあたる山の斜
26 面を登ろうとした。うち1名は、斜面を数メートル登ったところで振り返り、水が押し寄せ
27 てくるのを見てさらに登るべく再び斜面側を向いたところで、後ろから押し倒されるように
28 津波にのまれて気を失った状態で半分ほど土に埋まった。もう1名は、津波に巻き込まれな
29 がらも水面に出ることができ、ちょうど流されて来た冷蔵庫に舟に乗るようにして入った。
30 冷蔵庫が波に流されて山の斜面にたどりつき、斜面に降り立ったところ、付近に半分ほど土
31 に埋まった状態の児童がいたため、負傷していたにもかかわらず、土を掘って助け出した。
32 助けられる側の児童も、自力で土を押しつけて起き上がった。

33 一方、山に避難した支所職員5名は、当初、津波に巻き込まれて濡れた状態の地域住民2
34 名とともにいた。支所職員のうち津波に濡れた1名と地域住民2名は、もう1名の支所職員

1 を付き添いにする形で、比較的早い時期に山を越えて入釜谷方面へ向かった。残る支所職員
2 3名は、山の斜面を大川小学校側に向かう途中、付近にいた地域住民と合流した。数名ずつ
3 に声を掛け移動を手伝うなどした結果、地域住民に助けられた児童1名を含めた10名が集
4 まった。その後さらに、助けを求めていた児童2名に気づき、同様に連れてきた。夜に入っ
5 て、雄勝側から山を越えてきた1名が合流し、計16名で山中で一晩を過ごした。斜面の中
6 でもやや開けた場所に移動し、倒木を渡して椅子代わりにしたり、ライターで火を付けて焚
7 き火をした。流れて来た布団袋の中に入っていた布団を利用したり、津波に巻き込まれてい
8 った手放したが同じ場所に流れ着いた食料を分け合ったりした。一晩を過ごす中で、津波
9 に巻き込まれて負傷していたとみられる地域住民1名が息を引き取った。

10 なお、まだ暗くならないうちに、支所職員らが大川小学校裏のコンクリート擁壁の上から
11 「誰がいるか」と声を掛けたところ、津波で流されて学校の校舎にたどりついた地域住民か
12 ら返事があった。「頑張れよ。」などと声を掛けたが、夜も余震や津波が続いたため学校まで
13 下りることはできなかった。支所職員は暗くなった後も笛を吹いたり大声を出したりして捜
14 索を続けたが、この他には助けを求める声はなかった¹⁾。暗闇の中、何度も津波が押し寄せ、
15 遠くでチェーンソーのようなエンジン音が聞こえた。翌朝、林道へ出て、入釜谷側へ山を下
16 った。

¹⁾ これとは別に、釜谷地区中心部の西側に位置する山中（稲荷神社付近）に避難した住民が診療所建物内に残った避難者の声を聞いたとする証言や、南西に位置する沼付近では夜間になっても津波に流された地域住民の声が続いていたという話を聞いたとする証言がある。